

第14回 世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

# 「心をはぐくむ言葉と絵本」

令和2年2月8日（土）

於：教育センター ぎんが

世田谷区立中央図書館

## 第14回 世田谷区子ども読書活動推進フォーラム

### 「心をはぐくむ言葉と絵本」

#### [開会挨拶]

教育委員会の生涯学習部長をしております、皆川と申します。本日は大勢のみなさんにご参加いただきありがとうございます。本日のフォーラムは、日ごろから子どもたちの読書活動に取り組まれているみなさまや関心のある方々にご参加いただき、子どもの本の魅力について再認識していただき、子どもの読書環境づくりに一層の理解を深めていただくことを目的としています。今年のテーマは、「心をはぐくむ言葉と絵本」として、詩や物語が子どもたちの心の成長にどう関わってゆくのかについて、講師のお二人にお話しいただきます。

寮美千子先生は作家として絵本、童話、詩などの幅広い創作活動をする傍ら、2007年から2016年の間、奈良少年刑務所で、詩と物語の授業の講師をされていました。詩や物語に触れることで、子どもたちの内面がどのように変化していったのか、子どもの成長について著書の内容を絡めながらお話をいただきたいと思います。

アーサー・ビナード先生は平成20年に世田谷文学館で開催された、子ども読書の日記念講演会の時にご講演をお願いしました。翻訳された絵本もたくさんある中で、最近ではセンダックの『父さんがかえる日まで』があります。また紙芝居制作でも、平和に関する分野でも精力的に活動されています。詩というと高尚なものというイメージがあるかもしれませんが、本来はとっても自由で気楽なものなのかもしれませんね。そして絵本は子どもから大人まで、また障害の有無にかかわらず、あらゆる人が楽しめる媒体として広く受け入れられています。本日は先生方のご講演から、身近な言葉で、絵本が持つエネルギーと子どもの成長への関わりについて考えを深める機会としたいと思います。本日はどうぞよろしく願いいたします。

## 【第一部】

司会者：寮美千子先生は外務省勤務、コピーライターを経て、1986年に毎日童話新人賞で作家デビューされ、2005年には泉鏡花文学賞を受賞されました。幼年童話から絵本、詩、純文学、ノンフィクションまで手がけられ、その題材はアイヌなどの先住民から宇宙天文まで幅広く及んでいます。2006年に奈良に移り住まれたあと、翌2007年から10年間、奈良少年刑務所で社会性涵養プログラムの講師を勤めてこられました。本日はご著書の『あふれでたのはやさしさだった 奈良少年刑務所 絵本と詩の教室』にも書かれた少年たちと関わられたご経験から、子どもと言葉についてお話しいただきます。

今日はお招きいただき大変光栄です。アーサー・ビナードさんのお話を聞けることを私自身がとても楽しみにしてまいりました。私は東京で生まれて、50年間東京近辺で暮らしてきました。幼少時代は千葉で暮らし、20歳から35歳ぐらいまでは下北沢、そして相模大野に15年いました。2005年に長編小説で泉鏡花文学賞をいただき、中心からでない物の見方ができる地と思い、翌年首都圏脱出を試みて、奈良に移住しました。子どものころから首都圏以外で一度暮らしてみたいと思っていたのです。

いろいろと奈良を見て歩く中で、明治の名煉瓦建築があると知り、刑務所に行ったのが大きなきっかけになったわけですが、奈良で古い日本の文化のよさにも気づきました。『空とぶ鉢 国宝信貴山縁起絵巻より』、『生まれかわり 東大寺大仏縁起絵巻より』、『祈りのちから 東大寺大仏縁起絵巻より』という絵本を作りました。いずれも絵巻の絵をそのまま絵本にしています。絵巻というと難しい印象があるかもしれませんが、昔のプロモーションビデオのようなものです。寄進してくれる信者をつくるためのツールとして、誰にでもわかり、ワクワクドキドキする展開があり、スーパーヒーローも出てきます。絵巻を読んでから、実際に信貴山や東大寺に行くと、「ハリー・ポッター」を読んでからユニバーサル・スタジオに行くのと同じような効果があるわけです。博物館で絵巻が一部展示されていてもどの場面かわかるようになる。日本人の共通教養として、絵巻をもっと広く知ってほしいと願い、私はこの絵本を作りました。残念ながら版元は倒産しており、東大寺のほうはミュージアムショップにしか売っていません、Amazonにならまち通信社の名で出品しているので、ぜひ。古事記にも興味を持ち、『絵本古事記 よみがえり イザナギとイザナミ』も作りました。絵は日本の幻想絵画の第一人者である、山本じんさんに描いてもらい、すばらしいものになりました。「別冊 太陽」では怖い絵本として紹介されていたりして、子ども向けでなく、本当に古事記に描かれた世界をそのままに描いています。

奈良ではこのような絵本の制作の傍ら、もともと古い建築に興味があったので、明治の名レンガ建築があると聞き、見に行ったのが奈良少年刑務所でした。とても刑務所とは思えない、入口も遊園地のようなところですよ。ここで刑務所が作成したVTRを見ていただきたいと思います。

<奈良少年刑務所 VTR 上映>

1908年、明治五大監獄の一つとして設計され、設計者は山下啓次郎氏、その孫が山下洋輔さんです。私たちは山下洋輔さんと共に「奈良少年刑務所を守る会」をつくり、壊されることが決まった事業を

覆し、2017年に国の重要文化財として保存されることが決まりましたが、同時に奈良少年刑務所は廃止となりました。私としては資料館や博物館にしてほしいと願っているのですが、現在、星野リゾートがホテルにすることになっています。

奈良に移住して2ヵ月後の9月に奈良少年刑務所で「奈良矯正展」という刑務所のお祭りのような会があると知り、建物の中には入れないが、庭などを見ることができると聞き、心待ちにして行きました。それが運命の日で、建物にはもちろん感動したのですが、展示されていた受刑者のクラブ活動の作品に感銘を受けました。水彩画、俳句、詩など、繊細な作品ばかりでした。私は刑務所に入っている子は、手をつけられず、凶悪なイメージがあったのですが、教官に伺ったら、「みなさん誤解なさっているのですが、刑務所に来ている子はおとなしくて、礼儀正しい子が多いのです」と。私も詩をラジオなどで発表してきたので、「詩は書くだけでなく、声に出して読んでみてください」とお伝えして、なにかお手伝いできることがあればと名刺を置いてきたところ、10ヵ月後に刑務所から電話がかかってきました。刑務所での教育を充実するために、情緒教育の授業をしてほしいとの依頼でした。授業をすることは想定していなかったのが驚いたのですが、どんな罪を犯した子たちなのかを聞くと、強盗、殺人、レイプ、放火、違法薬物など。正直、怖い気持ちが出てきましたが、懇願され、こんどは刑務所の中も見ることができるといふ思いもあり、同じく建築ファンである夫と二人で訪ねました。

そこで女性の統括官、細水令子さんとお会いし、お話を伺いました。

「被害者には申し訳ないけれど、ここにいる子たちは皆、加害者である前に被害者だったのです。大変困難な背景があった子ばかりなのです。長い間、矯正業務に携わってきましたが、困難な背景が一つもなく、犯罪に関わった人間は一人も見ることがありません。貧困、暴力、言葉による虐待、発達障害が犯罪者になるわけでは絶対ないのですが、発達障害を抱えながらも周りから適切な支援を受けることができず、自己肯定感が低くなり、ひどく傷ついた子もいます。教育虐待とって、経済的に豊かな家庭で育っても、がんばりすぎで息が切れてしまった子。中学校で不登校や引きこもりになったり、犯罪にまで行き着いてしまう子。みんな正しい愛情を受けてこなかった。口を開けば殴られる、親から『生まれてこなければよかった』と言われるようなことを積み重ねてきた。とにかく悲しい、苦しい、お腹も空いているから、つらさを感じないように心の扉を閉じてしまう。そうすると、感情がなくなってしまう。人間は都合よく悲しさだけを取り除くことはできない。普通の人でも突然交通事故で親しい人を失うと、悲しみすら感じられない。そんな時におもしろいテレビを見ても笑えないように、何も感じられなくなっているのが彼らなのです。凍りついた荒野に一人で立っている、それが彼らの見ている景色です。情緒が育っていない、自分の気持ちがわからない人間に、人の気持ちがわかるはずがありません。自分が人として扱われてこなかったから、他者を人として扱えない。暴力によって支配されてきたから、暴力によって他者を支配する。レイプ、放火、覚醒剤も、無理に無理を重ねて、内圧が高くなってしまった人たちが、生きるために手を出すからどんどんはまってゆき人生が駄目になる。そんな彼らの情緒を育ててあげたい。そのために絵本や詩を使って教室を開いてほしい」と依頼されたのです。

私は「人を殺してしまうまでに凍っている人の心を、絵本や詩で動かすことができるのか、無理なのでは？」と一瞬、思いました。しかも月に一度、期間は半年と聞いて、たった6回では無理だと思ったのですが、詩の教室のほかに、絵の教室、SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）が月にそれぞれ1コマ（1時間半）ずつあり、合計18回になるので安心して下さいとのことでした。「彼らは『助けて』も言えない子だった。嫌なことを頼まれても無理と言えない。このまま外に出したら、また戻ってきてしまう。なんとか『助けて』と言える子にしたい」と懇願され、とうとう引き受けることになりました。正直、何をやればよいのかわかりませんでした、「寮先生のお心のままに」と言われ、その2週間後から、助手として夫も同行しての教室がはじまったのです。月1回、足かけ10年、休まずやってきました。無理だと思っていたのですが、授業の最初の1時間目からいきなり効果が上がりました。第1期生は6回で見違えるようになりました。なぜこんなにうまくいったのか、メンバーがよかったのかとも思いましたが、会を重ねる中で、一人としてよくならない子がいなかった。必ず変化があり、目の前で、一瞬にして、驚くほど変わってゆきます。

詩の教室に通う子は、刑務所の定員700人弱、13の職業訓練所から、10人が選ばれて集まりました。皆と一緒に作業ができなかったり、注意されてもコミュニケーションがうまくできないなど、いわゆるトラブルメーカーの10人です。教室では机をまるく並べ、間に教官も2名入ってくれます。初めて子どもたちに会った時は授業ができるとは思えませんでした。何かに怯えていて小さくなっている子、むやみに俺様オーラを全開にしている子、ぼーっとしていて誰の声も耳に入らず、目が宙を泳いでいる土の塊のような子、下を向いていてまったく声が出ない子もいます。最初はどうしたらよいかわかりませんでした。私は和光大学で非常勤をしていたり、障害者施設でワークショップをしていた経験もあったので、その時に使っていた私の絵本『おおかみのこがはしってきて』を使うことにしました。

<『おおかみのこがはしってきて』を一部朗読>

これはアイヌの物語で、お父さんと子どもの対話です。まずは私と一緒にみんなで読みます。その次には二人ずつ前に立って、朗読をしてもらいます。いわゆる朗読劇です。中には小学校に行ったことのない子もいますので、最初はビビるのですが、なだめたり、すかしたり、先生もいろいろ苦心なさったり、私もコスプレ用にアイヌのマタンプシを必死で縫いました。彼らは超緊張しながらも、なんとか読んでくれます。聞いているほうも緊張します。一生懸命読むと、皆が拍手をしてくれます。おぎなりの拍手でなく、心からの拍手です。前にいる子は何が起こったのがよくわからない表情をするのですが、「どうでしたか」とたずねると、「緊張しました。でもがんばってやってよかったです」と、なんとかつぶやくのです。絵本は道具です。お話を読み終わって、意味がわかったからおしまいなのでなく、声に出すという一つひとつのパフォーマンスには意味があり、違いがあります。聴くほうは1時間半ずっと同じお話でもまったく飽きません。違うお父さん、違う子どもがいろいろな形で出てきます。お父さんに甘えることができなかつた子が、いかにもかわいい子どもらしい声でセリフを読んでいたり、最後のころには、自ら挙手してやりたがる子も出てきました。私は、1時間半でこ

ここまで変わるのか。絵本の力のすごさ、声に出してみんなに聞いてもらうことで、おそらく読んでいる本人が癒やされてしまうんだ、と驚きました。

人と交流する気がゼロの子、心を開けば傷つくだけと思ってきた子が、皆の前で本を読んで拍手をもらうだけで、小さな自己肯定感がめばえて、前向きな気持ちになり、心の扉が開いてくるのです。こういう時に「やりたいけれど、ちょっと…」という子の背中を押しますが、できない子には無理をさせませんでした。「先生、無理です」と言ってきたら一緒に授業をしている教官が「いいよ、やらなくて。よく言ってくれたね。でもやりたくなったらいつでも言ってね」と伝えました。すると、「今日、生まれてはじめて信用できる大人に会いました。これまでは無理ですと言われたら、甘えるんじゃないと叱られたり、君ならできると励まされたりして辛かったんです」と。みなさん、覚えておいてください。よかれと思った励ましが本人には辛いことがあるんです。そのままを受け止めてあげるのが大事なのです。

教室はとても好評だったので、次にはもう少し人数を増やして、『どんぐりたいかい』を使って集団劇をすることになりました。宮沢賢治の「どんぐりと山猫」のどんぐりのせいくらべの裁判の場面を拡大して、少しコメディの要素も入れました。登場人物6人とナレーター1人の札を作って、「好きな役割の札を取ってください」と伝えたら、その時に最初に「やります」と手をあげたのは、1ヵ月前に無理ですと言った子で



した。私は、信じて待てばいいんだ、用意ができていない子はいるけれど、自分でも育ちたいんだ。育とうと思っているところを叱ったり、励ましたりしてはいけなくて痛感しました。教室では、声が出ない子も6回目には出るようになり、また激しいチックの子も目の前で症状が止まるなど、待つことがどれだけ大切か。実際にやってみると6人は当然ながら最初は息が合いませんが、次第に声も、息も合ってきます。

誰とも調子が合わない子がなぜうまくできるのか。それはこの教室が安心・安全な場所・時間だからなのです。教官は必ず授業の前に「この教室では採点はしません。仮釈放が早くなったり遅くなったりはしません。この教室の目的は外に出た時に、困った時は助けてと、嫌なことは嫌と言って、生きてゆくために、幸せになるためにコミュニケーションが取れるようになることです。刑務所生活は大変厳しいので、せめてこの教室にいる時は楽しかったなと、自分の気持ちが出せたと言えるような安心できる場にしたいと思っています」と伝えます。私たちもその言葉を守ります。「よくできたね、うまい！」という評価の形でなく、「先生も今の楽しかったよ」と共感する形です。「死にたいんです」と言われたら「そう、死にたいの。そんなにつらいことがあったんだね」と受け止めます。ずっと寝ている子がいても注意はしません。「大丈夫？具合悪いの？」と声をかけると、「夕べ暑くて眠れなかった」と。それ以上は起きろとも寝ていていいとも言わず、授業は続行します。人生訓は言いません。

指導もしません。この教室の中だけは刑務所の悪口も言っていていいことになっています。彼らには、安心・安全な場所が確保されています。彼らはいつも萎縮しているから、自分の力を出せないのです。この教室では目の前でぐんぐん伸びてゆきます。彼らは安心・安全な場所がなかったから犯罪に走らざるを得なかったのです。

アーサー・ビナードさんの著書『もしも、詩があったら』の中に、オグデン・ナッシュの「家庭裁判所」という詩が紹介されています。

<上記作品を朗読>

まさにこの詩のとおりだと思います。家庭も学校も自分の居場所ではない。居場所を求めてさまよっているうちに犯罪者になってゆく。人に指導されて、説教されて、うれしい人なんて、子どもでも一人もいませんよね。だから安心・安全な場所、人、時間を作ってゆくことが、私たちの詩の教室の役割でした。

この授業が終わると、見違えるほどになり、みんなの仲間感が出てきます。たった1時間半の授業を2コマですが、なんだかいいチーム感、一体感が生まれてゆきます。そろそろ詩を書いてもらおうかと思うのですが、学校に行っていない子もいますし、詩が何なのかわからない子もいるので、金子みすずさんの詩やまど・みちおさんの「ぞうさん」をみんなで歌ったりしました。最初は幼稚臭いと言っていたのですが、結局お遊戯まですることになりました。子ども時代を子どもらしく育たなかったのも、これが彼らには大事なのです。彼らは一般の人よりも「男らしくしなきゃ」と思ってきた人たちで、それがうまくゆかずに罪を犯した人たちです。そういう観念を捨てる上で、お遊戯は重要で、それによって一皮むけるのです。でも、一人だけやらない子がいました。私は「『ぞうさん』って知っているでしょ」と言いました。すると「知りません」と言うのです。彼は幼稚園にも小学校にも通っていなかったのも、「ぞうさん」を知らなかったのもです。私は「『ぞうさん』を知っていますか？」と疑問形で聞くべきだったと、とても反省しました。

まどさんや金子さんの立派な詩を読む活動はしましたが、それ以上に彼ら自身が書いた詩を読むほうがずっと効果がありました。まずは詩について説明をしました。「詩というのは、短い言葉で自分の気持ちを表すことです。どんなことでも構いません。今日は暑かったなあ。仕事がしんどかったなあとか。小さなころに悲しかったこと、これから先の夢や希望、不安。刑務所に対する文句を書いてもOKです。どうしても書くことが見つからなかったら、好きな色について書いてね」と伝えました。そうすると「ぼくはうすむらさきの花が好き」と書いてきたりするので。書かなければわからない気持ちが七色に見えてきて、犯罪者の心の闇とか一言では片付けられない、すごい作品が次々と上がってきました。

私は、作品を集めて本を作りたいと思いました。法務省の許可も必要ですし、大変な作業でしたが、編集を進めました。タイトルは「くも」という一行の詩から取りました。「くも 空が青いから白をえらんだのです」。作者は薬物中毒で依存症の治療をしていました。彼は丸刈りの頭にすごく大きな傷がありました。父親に金属バットで殴られて、頭が割れて縫った跡だそうです。覚醒剤をはじめたのは

13歳と聞いて驚きました。彼は自信がないからか下をむいて読むので、最初に読んだ時はよく聞こえませんでした。「もう一回、顔をあげてゆっくり読んでくれない？」と伝えると、彼は一生懸命読んでくれました。皆が拍手をしました。すると彼は「先生、話したいことがあるんですが、いいですか」と自ら話しました。「ぼくのお母さんは今年で七回忌です。お母さんは体が弱かった。お父さんはいつも殴っていました。そのころ僕は小さかったのでお母さんを守ることはできませんでした。お母さんは亡くなる前にぼくにこう言いました。『辛くなったら空を見てね。私はきっとそこにいるから』。僕はお母さんのことを思って、お母さんの気持ちになって、この詩を書いてみました」。私はこの一行にこんな思いがあったのか、大変ショックでした。空が青いから、あなたに見えるように、わかるようにまっしろな雲になって浮かんでいますからね、あなたを見つめていますからねというお母さんの気持ちを、「くも 空が青いから白をえらんだのです」と彼はこんなに短い、こんなにすてきな言葉で形にしたことをすごいと思いました。

私が胸がいっぱいになって感想を聞けずにいると、受講生の一人が「この詩を書いただけで親孝行やったと思います」と言ってくれました。罪の意識を持っている彼を励ましてくれる、こんなやさしい言葉をかけてくれた子は、殺人というとんでもない罪を犯した子でもあります。また一人が手をあげて、「僕は、〇〇君のお母さんは雲のように清らかな人だったんじゃないかと思います」と発言しました。次々と手をあげて感想を言う姿を見て、私は「どうしてこんなにすてきな君たちがここにいるのか。なぜ罪を犯したのか。その想像力があつたら、犯罪の重さを十分に考えられるのではないか」と言いたいところをぐっと我慢しました。この時、もう一人手をあげた子がいましたが、最初は声が出ませんでした。こういう時は、待ちます。この時もしばらくして「僕はお母さんを知りません。でもこの詩を読んで空を見上げたら、僕もお母さんに会えるような気がしてきました」と言って、泣き伏してしまいました。クラスの子はみんなやさしくて、「さみしかったね」「ぼくのお母さんも小さい時にいなくなったんだよ」と彼を慰めてくれました。泣いている彼は、実は刑務所に入ってから自傷行為が絶えない子でした。それは、彼がまじめに罪に向き合ったからでした。世間では罪に向き合えとよく言われますが、そんなに簡単なことではありません。向き合ったら死にたくなるようなことをしている子たちなのです。みなさんだって、自分の欠点と向き合うといってもなかなか難しいと思います。彼は殺人という罪と向き合い、「僕は生きていたらいけないんだ、こんな人間は生きてはいけないんだ」と自殺未遂を繰り返してきました。その度に懲罰を受けてきました。彼はおそらく生まれて初めて、この教室で、公の場で親のいない悲しさを告白できたのではないかと思います。

その日から彼の自傷行為が止まり、1ヵ月後、教室に来た時には見違えるほど、縮こまっていた背中が伸びて、背が高く感じましたし、みんなとも話ができるようになっていました。通常は授業が終わると私は彼らには二度と会えないのですが、たまたま半年後、テレビの取材があり、彼がインタビューを受けている場に同席しました。その時に胸を張って「ぼくは作業所で副班長になりました」と言ってくれました。その後の言葉に、愕然として私は椅子から転げ落ちそうになりました。「最近休み時間にみんなの人生相談を聞いてあげています！」というのです。辛い思い、悲しい思いを経験し



たからこそ、人の苦しみと悲しきを受け止められると思うのです。だから彼は慕われるようになったのです。彼はもう大丈夫だと私はその姿を見て思いました。このようなことが次から次へと起こる教室でした。

土の塊のようにボーッとしている子は、「すきな色」という詩を書いてきました。「ぼくのすきな色は／青色です／つぎに好きな色は／赤色です」と書いてきました。私が何と言ってあげたらよいものか困っていたら、勢いよく手をあげた子が言いました。「〇〇君の好きな色を一つだけでなく二つ教えてもらってよかったです」。なんとやさしい感想なんだろう、私には考えつきませんでした。隣の子も「二つも教えていただき大変うれしかったです」。3人目の子も「〇〇くんは赤と青がほんまに好きなんやなあと思いました」と、やさしく言ってくれました。その感想を聞いた当の本人は、花がほころぶように微笑んでいました。教官が「いい顔をしているじゃないか」言ったら、ちょっと恥ずかしくなってしまったのか、頬がぼつと赤くなって、まるで悪い魔法の魔法が解けて人間にかえったかのようでした。今まで宙を泳いでいた視線も焦点が合うようになって、いきなりその日からみんなとも話せる子になりました。

ふんぞり返った俺様君も、虐待（によるダメージ）で声が出ず、話しかけられるのが嫌だからふんぞり返っていたわけです。ヘラヘラ笑ってご機嫌をとったり、ふんぞり返ったり、内にこもったりするのは、すべて彼らの鎧で、裸の自分でいたら馬鹿にされる、軽蔑されると思っているのです。でも「この人たちに受け止めてもらえる」と思えば、鎧を脱ぐことができるのです。この子が「面会で妻の小言にあんどする」「物言えずうなずくだけの十五分」「よく笑う母が心の救いです」という川柳を書いてきました。全然言葉の出ない子なので、本当に彼が書いたのかとみんな驚いたのですが、「本当に、小言とか言ってもらえると見放されてないって思うよな」など、彼の詩に共感する感想が多く、ふと彼を見たら、今度はお行儀よく座っていました。彼は6回目の最後の授業までまったく姿勢を崩すことなく受講しました。この時、私は実感しました。態度の悪い人がいる時、問題は彼にあるのではなく、こちらにある。こちらが受け止めきれない。安心するほど受け止めることができたら、彼も鎧を脱ぐことができるのだと。人は自分のことをちゃんと受け止めてくれる人には、いい加減な態度は取れないのです。最後の授業で、彼は「刑務所にいる間、ずっと先生の授業を受けていたかったです」と言ってくれて、私も涙が出そうになりました。

「刑務所はいいところだ」という詩を書いた子がいます。「刑務所は いいところだ／屋根のあるところで 眠れる／三度三度 ごはんが食べられる／お風呂にまで 入れてもらえる／刑務所は なんていいところなんだろう」。教室に来ている子はひどい目に遭っている子が多いのですが、それでもさすがにこの詩に共感する子はいなくて、「僕はやっぱり婆婆のほうがいいです」「家族と暮らしたいです。産まれた赤ん坊の顔を見ていないです」「以前、医療少年院にいて、ここより待遇がよかったです」などの感想が出ました。でも本人は、「みんなにいろいろと言ってもらえてうれしかったです」と言います。この子は人にいろいろ言ってほしかったんだなと思ったら、私は泣けてきてしまいました。「宿題で詩を書いてきて」と伝えた時に、この子は「先生、宿題ってなんですか」と聞いてきました。親に育児

放棄されて、小学校にも通っていないのです。福祉の網の目から漏れた子、そして教育に失敗した子が刑務所にいるのです。彼らの自己責任だけとは言えません。体に障害がある人には支援がありますが、心が傷ついた人には支援がなく、わかってくれる人がいないから、犯罪に追い詰められてゆくことに気づきました。彼らが口を開いたら、心を許したら、やさしさがあふれ出るのです。数々のひどい目に遭ってきた子たちだから、恨みつらみがヘドロのように出てくるかと思いきや、自分たちと同じ境遇の仲間にやさしい、いたわりの言葉が出てきます。言うことによって癒やされるのです。

私たちは安心・安全な場所、ここでは誰も傷つけませんという土俵を作ることに専念しました。どんなに乾いた土地でも、適切な水と温度と光があれば、草木は芽を出し、勝手によい方向に伸びてゆくのです。私たちが指導をしたり、矯正したりする必要はないのです。人は人の輪の中で育つのだと実感しました。

私は、誰が読んでもおもしろい詩にこそ意味があると思っていたことを反省しました。詩に何が書かれているかは、あまり問題ではないのです。その子がこれは詩だと思って、書いた言葉があり、これは詩だなんて思って心寄り添ってくれる友だちがいてくれたら、どんな言葉もすばらしい詩になるんだと思いました。それを分かち合う場と時間を持つことが、人生が変わるきっかけになる。言葉の持っている意味は、人と人とのつながりです。どんなに下手でも、その場でその役割を担っていれば十分なのです。今、そういう言葉を私たちは日ごろ大事にしているでしょうか。メールや LINE などインターネット上でたくさんの言葉を交わしていますが、それらは「消費される言葉」であり、やりとりすることで余計不安がつくような言葉、焦って情報収集するような言葉なのです。詩のように、ここまで心を癒やしている言葉になっているでしょうか。

先日亡くなった舞踏家の大野慶人さんから 30 年前に言われました。「詩は大切です。もっともっと大切になってゆきます。大事にしてください」と。そういう詩の言葉を、できがいい悪いに関係なく、みんなが心を寄り添わせ、分かち合えるような場をこれからももっともって持てることを切に願い、私の今日の話をごきまでとしたいと思います。

## 【第二部】

司会者：アーサー・ビナード先生は米国ミシガン州のご出身で、1990 年に来日。詩集『釣り上げては』で中原中也賞を受賞。『日本語ぽこりぽこり』で講談社エッセイ賞を受賞。著書に『ドームがたり』、翻訳絵本に『父さんがかえる日まで』、『なまずこのつぺ?』（フレーベル館）、紙芝居『ちっちゃい こえ』。またエリック・カールの絵本の日本語訳やいわむらかずおの絵本の英訳など、多数の著書があります。本日のテーマは「絵本のむこうに日本が見える。アメリカ生まれの詩人がこの国の文学とこれからを語る」です。

今日は、詩人の特権ともいえますが、詩人の言葉の自由を大いに使ってみなさんとお話したいと思います。寮さんの話を聞いてから、僕が話すとなると、どうして自分が娑婆にいるか、なぜ服役しなかったのかと考えてしまいます。自分自身の意識としては、自分は無罪だとはもちろん思わないし、ただいま仮釈放中という感じです。今の日本の社会、生まれ育ったアメリカの社会の中で、自分が社会の常識や決まりに沿って生きているとは思いません。自分が世話になったというか、尊敬している文学者たちの経歴を細かく見てみると、ほとんどの人が逮捕されている。僕は田中正造が好きですが、江戸時代にも、明治になってからも捕まっているんです。詩人で一番尊敬しているのは、1901 年に生まれた小熊秀雄という人。1940 年にこの世を去りましたが大日本帝国がもっとも嫌った詩人で、犯罪者扱いされました。あの時代にちやほやされて賞をもらった北原白秋と比較すると、評価が高いのは白秋ですが、でも僕は小熊秀雄のほうが 100 万倍、文学者として価値があると思う。歴史的にみても、今の社会の中で文学を考えても、そういう大きなズレがある中で、私は進んで刑務所に入ろうと思わないし、娑婆のほうがいいけれど、文学の本音を見失わない生き方のほうが権力組織の作るルールよりは、大事だと思っています。

では、僕はどうして逮捕されていないのでしょうか。僕は運がよくて、本音を話せる大人に囲まれて育ったからかもしれません。自分をわかってくれる人がいたし、その中でも一番、僕が爆発しないように包んでくれた人は父親でした。母親から言わせると「それはずるい」ということですが。父は叱る人ではなく、権力者でもなかった。しかも、僕と一緒に悪さもする人でした。父親はどこへでも連れていってくれる人でした。父親にとっても仲間ができて楽しかったようで、父親と友人たちで、僕も釣りに行きました。僕はいつも怪我ばかりしていたので、傍から見たら放置のように映ったかもしれないけれど、見てくれていたし、守ってくれていました。そういう父親に、12 歳まで仲間として一緒に遊んでもらいました。

僕が中学生になる前の週末、父親と仲間たちと、ミシガン北部の五大湖にそそぐ溪流の釣り小屋に行くことになりました。ふだんは車で行くところですが、仲間の一人が購入した小型飛行機で、金曜日の夕方に行く計画でした。ところが天候が悪くて日程が延期になり、日曜日の出発になりました。

僕はたまたまその日、母方の祖父と先約がありました。この祖父はとても厳しく、自動車部品の社長をしていましたが、ゼロからすべてを作りあげた苦労人で、おまえもそれぐらいがんばらなきゃと僕もいつも言われていました。家族の中で、祖父と一緒に過ごすのは僕だけでした。祖父は次々と家

を建てる人で、僕はその庭作りを頼まれていました。僕は祖父と一緒に、いわゆるアルバイトのように働き、仕事が終わると、彼から 100 ドル札をもらうのです。当時 100 ドルは今の 3 万円に相当します。そんなわけで、祖父は厳しいけれど、耐えればいいことがあると思ったので、約束をドタキャンするわけにはゆかず、僕は釣りに行けませんでした。

天気も回復して父たちは出発し、僕はヘトヘトになるまで働いたわけですが、夕方になっても父たちから連絡がありませんでした。そのうちに警察から「飛行機が墜落し、4 人のうち 1 人だけ生き残った」と連絡がありました。日付が変わったころ、父が死んだことがわかりました。

これが僕の 12 歳の時の経験で、とても辛いことでしたが、今、52 歳になって、自分の経験が辛いとは言えなくなりました。なぜなら、僕の 100 万倍も辛い人に出会ってきたからです。1945 年の 8 月 6 日の朝、ごはんを食べていたら、ピカッと光って、そのあとすべてを失って、傷ついても生き延びて、孤児になった人の話を聞いたら、僕はとても恵まれていると思いました。儲けることしか考えていない祖父がついていたので、僕は孤児になって放り出されたりはしなかった。母は働いて、僕と妹二人を育てたけれど、がんばれるだけの経済的な土台はあったのです。僕は祖父から「貸しても借りるな」と言われていたので、人生で一度も借金をしたことはありませんでした。12 歳まで恵まれて、父親と時間を共有したことはどれだけありがたいでしょうか。それは自分の足場として今も続いています。児童文学の作品をたくさん書き、翻訳してきた石井桃子さんは「自分の子ども時代が自分を一生支える」と繰り返し語っていらっしやいましたが、寮さんの話を聞けば、「支えてもらえない”子ども時代の影響がどれほど大きいか”がわかります。僕は“支えられる”子ども時代を送ったことを感じています。父の話をしているので、父が出てくる詩を読みたいと思います。

<『釣り上げては』より「釣り上げては」、『アーサー・ビナード詩集 ゴミの日』より「いま、なん時？」を朗読>

実はこの詩「いま、なん時？」は、僕が 4 歳になる前ごろの実話です。僕はいつでも「8 時です！」としか言えなかったのですが、父は本当に夜 8 時になると「おい、アーサー、何時だ？」と聞き、小さい僕が「8 時です！」と正解を出す。猛烈に教育熱心な叔母一家が訪ねてきた時などに、こうしてデモンストレーションするのです。いまだに叔母は僕が天才だと思っているのですが、間違った答えや変な感覚、ずれた思いをどうやって捉えるかということを、僕はこういう形で両親から教えてもらったのかもしれない。詩をどうやって教えるかについても、たぶん寮さんと僕は共通しているかもしれませんが、“教えない、でも一緒に遊ぶ、おもしろがる”ことができます。そういう感覚が自分を否定することなく、焦ることなく、少しずつ大事なことを学べたと思います。

もうひとつ自分にとってよかったのは、早くから本音で語る作家、詩人たちに出会う幸運に恵まれたことです。その言葉に 50 年間助けられ、支えられていると感じています。家族との時間がもう少しよい時間だったら、見知らぬ人の詐欺にも巻き込まれないですんだのにという詩を寮さんも読んでくれましたが、その詩を書いたオグデン・ナッシュの、アメリカの子どもの詩を収録したアンソロジー『ガラガラヘビの味』のタイトルにもなった詩を朗読します。

<「ガラガラヘビの味」を朗読>

すごくくだらないけれど、実にいい詩で、しかもこういうことは（現実に）あります。慰めているようで、苦しめる。「励ましは最大の拷問」ということにもつながるし、オグデン・ナッシュは、僕が3歳の時に死んでいるから記憶にはないけれど、オグデン・ナッシュの言葉が自分の中に入ったことで、社会を見るレンズをもらいました。自分自身を見抜く視点も、たくさん彼の作品の中に入っています。生身の人間だけでなく、そういう大人が周りにいて、本を読む、読んでくれる大人がいて、そういう言葉に出会えたことが大きい。

僕が一番繰り返し読んだのは、エリック・カールの『はらぺこあおむし』で、兄妹3人が読んだ本はまだ家にあります。次に読んだのは、モーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』で、僕が生まれる3年前、1964年の作品。主人公のマックスは悪い子で、部屋の壁に穴をあけたり、大人が怒ることばかりします。狼のぬいぐるみのようなコスチュームを着て、お母さんが怒ると、吠えたり、嘔むふりをするので、お母さんは「ゆうごはんぬき」とマックスを監禁します。日本では家から追い出す話をよく聞きますが、アメリカでは帰ってこなくなるのであまり追い出さず、監禁です。マックスが部屋にいと、壁がだんだん森に変わってきて、絨毯も土になってゆきます。むこうには海があって、歩いてゆくと船があって、その船にはマックスと書いてある。1年と1日航海をして、たどり着いたのが、かいじゅうたちのいるところ。恐ろしいかいじゅうたちがいるけれど、マックスは怖がらず、「しずかにしろ！」と睨み返します。これは処世術の基本のきで、かいじゅうたちは恐れ入って、静かになります。マックスは王様になって、お祭りで一緒に踊ったり…。でもみんなが寝ていると、マックスは少しさみしくなって、ちょっと会いたい人もいる気持ちになって、王様をやめることにします。これは足を洗うとって、けっこう難しいことですね。かいじゅうたちは「たべてやるから いかないで」と言いますが、マックスは「いやだ！」と、引く時の勇気を出して帰ってきます。また1年と1日航海をして戻ったら、いつのまにやら、お母さんに放り込まれた寝室にいて、「ゆうごはんが おいてあって、まだ ほかほかとあたたかかった」。

これは児童文学において、一番うまくいった「夢落ち」です。お母さんの存在もどれほど大きいかもわかるし、マックスは悪ガキで叱られているけれど、どれほど愛されているかもわかります。センダックは、お母さんの側にたつてマックスを叱っているのではなく、100%、マックスの味方です。子どもと一緒に悪さを楽しみ、子どもと一っしょにかいじゅうたちを睨み返して、子どもと一緒に愛情を感じる。書いている本人が子どもたちと一緒になのです。

ところで、僕はセンダックの本を翻訳しているのですが、この話はパクリでもあります。中国の昔の地名で、邯鄲（かんたん）という町に、盧生という青年が出かけてゆき、50年の栄枯盛衰を経験して夢から覚める「一炊の夢」が元です。センダック本



人は中国の故事をふまえて作品を作ったとは言っていませんし、アメリカの文芸評論家も中国文学を知らないで気づいていません。だから僕が語るしかないけれど、センダックが、盧生をマックスにして、お母さんの関係を入れて、そしてかいじゅうたちを登場させました。1967年にこの本が出てから、くりかえしセンダックは、このかいじゅうは誰かと聞かれていて、「私の家族です」と答えています。家族はそれくらい恐ろしいものなんだということは、僕の祖父も怖かったので共感できます。

センダックの家族について掘り下げると興味深いのですが、彼の家系はユダヤ系なので、家族の多くがナチスに殺されています。センダックにとっては、家族を描くというのはホロコーストを描くということ。だから手強いかいじゅうたちはホロコーストを生き延びた人たちで、それに対してマックスが睨み返すというのは相当の緊張感があります。センダックが幼少のころ体が弱くて、外で遊べなかったという背景もありますが、家族がどのような組織なのかということは興味深いと思います。

1970年、僕が小学校に上がる前には『まよなかのだいどころ』という作品も出しています。センダックの本は教育上よろしくないのに、母はすぐを買ってくれて、僕は大好きでした。それから11年後、1981年の作品が『父さんがかえる日まで』。この時、僕は中学生で、一番下の妹は小学校に上がる前。父は死んでいて、僕が彼女の子守りをしています。母は一番下の妹を出産する時に体調が悪く、家事もできなくなったので、僕がすべてを担うことになりました。それは母が復帰しても続き、この本は僕が下の妹に読んであげていたもので、本の設定とまったく同じでした。

<『父さんがかえる日まで』を朗読>

僕がこの作品の翻訳をはじめたのは2012年で、まだセンダックは生きていて、翻訳ができたらいろいろと相談しようと思っていたけれど、亡くなってしまいました。著作権を引き継いだ人たちとずっとけんかしていて、出版までに6年が経ってしまいました。センダックが先を見通していたことは間違いなくて、彼がどういうゴブリンを想像していたのかはもう聞けませんが、1981年当時のことを思い出すと、ゴブリンはテレビかなとも思います。僕はホルンは吹けないので、妹がうるさいなと思ったら、テレビの前に座らせるのです。英語でテレビのことをElectric baby-sitter（電気じかけの子守）といいます。生身の人間が互いに無防備になって、本当の言葉でつながっていない。姉と妹が時間を過ごしているけれど、別々の世界にいるのです。

赤ん坊はどんなことにも付き合ってくれるし、なんでも一緒にやりたい気持ちをもって生まれている。でも大人に近づいてゆくと、自分のことばかりになるし、お母さんは育児放棄だし、お父さんは不在。そういう時にゴブリンが入ってきます。センダックの描くゴブリンは「ハリー・ポッター」のゴブリンとは違うし、中国の文学にも基づいていません。彼が感じていた“互いに向き合うことのない僕ら”の間に入ってくるものについては、僕が1981年当時感じていたことと、翻訳をしてきたこの6年に感じてきたことは違うのです。今のほうが断然わかりやすく、今のゴブリンは、アマズリン、グーグリン、ヤフリンなど。いつでも24時間、赤ん坊がラリる（中毒する）ようにさせているし、今日も田園都市線で周りの大人はみんなラリっていました。そういう状況において、この『父さんがかえる日まで』はさらに力を発揮しています。文学作品の本質をつかもうと、大人が物語を作ったり、

語り直したり、翻訳したりすると、作者が亡くなったあとに大事な本音が伝わります。刑務所に入った少年は、誰かと本気で向き合わずにきた可能性があります。僕らは娑婆にいても、誰とも向き合わずに過ごすことは多いけれど、向き合うべき相手はいっぱいいます。絵本の中にもいっぱいいて、センダックもその1人であり、エリック・カールもまた僕にとってそういう作家です。

エリック・カールの作品は『はらぺこあおむし』も『ホットケーキできあがり!』も、どの作品も楽しくて誰でも入れる世界ですが、どういう体験からこの『えを かく かく かく』を書いたのでしょうか。6歳でニューヨークから両親の祖国・ドイツに移り住んだ時は、ナチスが政権をとったころでした。彼は英語で育ち、ドイツ語は外国語で、その中で彼はナチスの教育を受け、空襲にあいながらも、なんとか言論弾圧の中で生き延びました。この本は、このことをふまえて書かれています。本音がつたわる土台として、そういう体験が絵本の中にあるのです。読者は、そういう辛い体験をふまえなくても絵本は楽しめるし、そこに分け入らずにすますこともできます。しかし、僕らがくりかえし読もうと思う物語には、そういう背景があるのです。寮さんも詩のエリート主義者とおっしゃっていたように、僕も詩のレベルや基準に意味があるとは思いません。でも基準があるとしたら、この詩が本気なのか、書いている人がこの言葉を自分の中から紬だしているか、という点だと思います。それは、その言葉と向き合わなければわかりませんし、向き合う時間を持てるかどうかが問われています。

ヒトラーは現実にはないものを語ることを禁じました。「墮落した」美術も見てはいけないと禁じました。しかし、おもしろいことに、美術品は没収され、美術館から消えていったけれど、でもそれらは燃やされませんでした。ナチスは馬鹿ではなくエリートで、想像力を発展させる表現、いろいろな可能性を見せてくれる、人間の思考を導く表現を自分たちのところに集め、大切にしていました。そのことにエリック・カールは絵本で抵抗しています。『えを かく かく かく』は、実は最初の翻訳には三島由紀夫も携わっていましたが、とんでもないゴミ訳で、その後に神宮輝夫さんが訳しています。『父さんがかえる日まで』の翻訳は僕が2度目で、最初は『まどのそとの そのまたむこう』（福音館書店）というタイトルで翻訳されています。

神宮輝夫という文学者は群馬に生まれ、大日本帝国時代に、彼はエリートで前橋の学校に進学しました。神宮さんの話を聞くまでに、いろいろな人の第二次世界大戦のころの話を聞いていました。みんな、英語が好きだったけれど、国民学校では、敵性語を学んではいけないという理由で英語は勉強できなかったと嘆かれることが多い。僕は「敵の言語を学ばなくてどうするんだ」と思っていました。が、神宮さんのお話によると、教育はすべて英語だったそうです。愚民の教育とエリートの教育は別々だったわけです。これはナチスとそっくりで、陸軍中野学校の教育は寮さんの刑務所（での授業）と同じということです。最後に『えを かく かく かく』を読みます。

<『えを かく かく かく』を朗読>

### [第三部] (質疑応答)

司会者：お二人のご講演に関して、言葉の力と子どもの成長や子どもの読書に関するご質問やご意見がありましたらお願いいたします。

質問者 A：アーサー・ビナードさんには、去年 1 月に文化放送のラジオ番組にて、私のはがきを読んでもいただきました。たった一枚のはがきを大切にしてくださりありがとうございます。今日はボランティアの方に車椅子を押していただき、参加することができました。以前もアーサーさんにお会いしたいと思ったのですが、車椅子での移動を支援してもらえず実現できませんでした。私は首肩こりで一般的に処方されている薬の副作用で目が不自由になりました。でも、タブレットでデイジー図書を利用して、お二人の作品も読んでいます。寮美千子さんやアーサー・ビナードさんの声でないのは残念ですが。図書館でも貸出\*されているかと思いますのでお知らせいたします。

\*世田谷区立図書館では、障害者サービスの登録者が、デイジー図書を含めた録音図書を利用することができる。

寮：大変な中、来ていただいてありがとうございます。障害のある人が、みんなと一緒に同じ立場で生きているということ、あたりまえのように理解する世の中にならなければと思います。そのためのシステムや政治、支援を整えてゆくのがこの社会の役割だと痛感しています。

ビナード：むしろ社会がそのことによって高められる。変なところで線引きしたりすることが全体のレベルを下げていることに、そろそろ気づいたほうがいい。

寮：どこかに「面倒みてあげている」という上から目線がある。受刑者に対しても、子どもに対しても。本当にみんなそれぞれすばらしい独立した人間であり、困難を持っている人たちとつながると、すごく世界が広がるし、深まる。

ビナード：こちらがまったく気づかないことに気づかされる。

寮：本当にそうですね。私も当初は学校の先生から「子どもから学びますよ」と言われ、何をきれいごとをと思っていたけれど、本当にそうだった。

ビナード：子どものほうが鋭いから。子どもが泣くとか、むずかる時は、そこに重要な意味があったりする。子どもは大人より危険をよく察知するから、泣いて、大人に知らせようとする。それによって生存率も上がる。

寮：役に立つ、立たないでなく、存在自体に意味があると、みんなが認められる社会にならなければいけない。関わらなければわからない。やまゆり園のような事件は、本当に関わるができなかつ



た人が起こしたことだと思う。

ビナード：「我以外、皆我が師なり」（吉川英治）、すごい重みのある言葉だね。

質問者 B：私は女子少年院で、絵本や詩を紹介する授業を週1回担当しています。再来週、最後の授業があるのですが、そこで紹介する絵本を迷っているのでおすすめを教えてください。13歳から23歳未満の人たちです。

ビナード：『父さんがかえる日まで』で、センダックが女の子を主人公にしたのは彼の冒険だったと思う。出版の業界では、男の子を主人公にしたほうがいいと思われています。これは思い込みだと思うが、男の子を主人公にすると、男の子も女の子もついてくるが、女の子を主人公にすると男の子はついてこない。つまり売上部数に影響をされると言われている。でも、これに応じて商品を作るべきでないし、女の子の主人公の作品に男の子が感情移入できないわけではない。センダックはこの点においても挑戦している。授業の生徒さんは女性だから響くかもしれませんね。

寮：もちろん私としては『おおかみのこがはしってきて』です。読んであげるだけではなく、子どもたち自身に声に出して読んでもらいたい。自分で読むことで、先生もみんなも楽しんでくれたというのは、ものすごく自信がつくんです。私は昔の教護院、今は児童自立支援施設で、小学生、中学生にむけて半年間、刑務所と同じプログラムをしてきました。そこで、子どもたちに『おおかみのこがはしってきて』を読んでもらいました。読むことでみんなから拍手をもらって、今までみんなの前で話せなかった子が、自分がやりたいと言って、変化が見られてきました。ぜひ最後の授業では、読んであげるのではなく、読んでもらう授業をしてほしいです。

質問者 C：精神障害者の人たちに対してグループワークをしていましたが、寮さんがおっしゃるような効果は感じませんでした。グループワークはSST（ソーシャル・スキル・トレーニング）などいろいろな手法やプログラムがあり、それらに則ってファシリテーターとしてやっていましたが、効果が出る、出ないには、コンテンツでなく、どういうコツがあるのでしょうか。

寮：私は効果が出たことしかなく、なんで効果が出るのだろうと不思議に思いながら18期を経えました。だから、コツと言われても、わかりません。実際に見学をしていただいたら、気づきがあるかもしれません。私の教室には、気をつけるべき12のポイント\*があるのですが、これらを完全に守れたら効果は上がるはずですよ。例えば、否定しない、無理に励まさない、評価しないなど、簡単なようで意外と難しいのです。これらのポイントを見ていただきたければと思います。

\*『世界はもっと美しくなる 奈良少年刑務所詩集』p.171「詩の教室」を開くための12のポイント参照

質問者 C：普通に学校などに通った中年の人が対象だと、やさしい本だと合わないですね。

寮：いえ、そんなことはありません。一般の大人でも、障害者でも、年齢が上の人でも、すごく効果があります。坂上香さんが監督をした映画『プリズン・サークル』でも公開中ですが、島根あさひ社会復帰促進センターという刑務所でも同じ授業をしています。

質問者 C：幼稚っぽすぎると感じる人はいないのでしょうか。

寮：絵本は子どもだけのものではありません。どんな赤ちゃん絵本でも大人がみて感じることもあり、和むところもある。絵本の持つ楽しさ、遊ぶ楽しさをぜひここで感じていってください、と伝えています。「こんな幼稚なものを」と思う、拒否する気持ち、枠組みを外してあげることが大事だと思います。



ビナード：『えを かく かく かく』も一度子どもと一緒に読んでみてください。これが表現の自由、想像力とは何か、言論の弾圧に抵抗する本だとは気づかないかもしれない。10回読んだら気づくと思う。あとがきを読んだりしたらすぐわかるけれど。絵本の中にはくだらない幼稚なものもあるから選ぶ必要はある。でも絵本の中には、一見子どものために作られたものの奥にすごい世界があったりする。『かいじゅうたちのいるところ』も世界文学の強烈なもので、無難なものが実は無難でないということがわかる。僕が小さなころに読んでいた、ドン・フリーマンの『ダンデライオン』も1964年に出版された作品だが、広告代理店がいかにやばいかを描いていた。ほとんどの読者はそのことに気づかないかもしれない。でも、みんなで読むとそれぞれ感じるものが違うから気づくかもしれない。10組が演じたら、まったく別の作品になる。そういう題材としては、それは大人のための読み物では文量が多くてなかなかできない。詩、短歌、俳句など、短くて、詩のようなものから広げることができて、作品を共有できる。

寮：『えを かく かく かく』を見ていて、黒く塗ったくまを「くろい しろくまです」と自分でするのはいいけれど、それを強要されるのは、とても怖い世界だと思った。最終的にこれは黒いしろくまですと言いくるめられてゆくのは、今の日本のようにも感じる。

ビナード：ある種の不条理だけど、風刺だね。

寮：同時に、みどり色のライオンのように、自分の好きなようにもできるとも読み取れる。一冊の本だけれど、全然違う見方ができるのが絵本のおもしろさだと思う。

ビナード：表現の自由を謳歌しようと、表現のうまさで相手を引き込むこともできるという両方の側面、諸刃の剣ということです。理解を求めながら、強引に押し付けているともいえる。

寮：言葉は怖い。

ビナード：技術だけで、言葉の評価してゆくという点では、最高の言葉の作り手は電通と博報堂。安倍政権の担い手です。

寮：科学技術もそうだが、テクニックだけを評価してゆくと、どんどんおかしな道に行ってしまう。いかに人の幸せに寄与するか。真実を求めてゆかないといけない。

ビナード：今、文科省の教育の方針をみてゆくと、すべて技術中心。

寮：戦争の技術にも政府はお金を出そうとしている。天文学会もなびいてしまいました。技術だけをひとり歩きさせようとしている。

ビナード：1945年に僕の母国が引き継いだ刑務所、巣鴨プリズンがあつて、今はサンシャインシティが再開発で建っています。A級、BC級戦犯が収監されましたが、BC級戦犯は優秀な現場エリートで、服役中もずっと勉強していた。寮さんの本の少年刑務所は、巣鴨プリズンと同じ。僕の感覚では、巣鴨プリズンが日本の最初のシンクタンクです。

寮：奈良刑務所（戦前、思想犯を収監）では、受刑者同士はまったく交流できないようになっていました。

ビナード：このことは教育の本質を鮮やかにあぶり出しています。政府の政策に抵抗するために、できることはいっぱいある。少年刑務所で詩の教室を開くこともそのひとつで、彼らの人生だけでなく、社会にも影響が出る。そういうつながりを楽しんでゆきたい。

寮：私の祖父は寮 佐吉、翻訳家で科学ライターでした。著書は戦争で焼けてしまったので、国会図書館で調べていた時、ある記事を見つけました。「詩は私のような愚か者が作る。しかし樹は神のみぞ作りたもう」。このジョイス・キルマーの詩を一番最初に引用してから、環境問題、生態系のことを書いていました。その詩を、アーサーさんが『ガラガラヘビの味』の中で紹介されて、「詩はぼくみたいなトンマなやつでも作れるが、木をつくるなんて、それは神様にしかできない」と訳していて、すばらしいと思いました。こんなふうに詩がつながっていて、うれしくなりました。

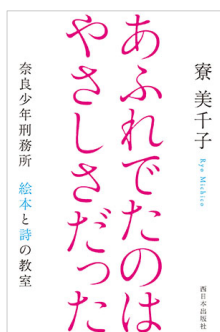
ビナード：言葉によって、自分が会っていない人たちとつながることができる。

寮：本はイタコみたいですね。祖父は私が生まれる前、戦時中に他界しているんです。死者の声を聞く、それがまたここで甦って、未来につながってゆく。今日はお目にかかれてうれしかったです。

## [書誌情報]

- 『あふれでたのはやさしさだった 奈良少年刑務所 絵本と詩の教室』著：寮美千子（西日本出版社）
- 『空とぶ鉢 国宝信貴山縁起絵巻より』著：寮美千子（長崎出版）
- 『生まれかわり 東大寺大仏縁起絵巻より』著：寮美千子（長崎出版）
- 『祈りのちから 東大寺大仏縁起絵巻より』著：寮美千子（長崎出版）
- 『絵本古事記 よみがえり イザナギとイザナミ』文：寮美千子 画：山本じん（国書刊行会）
- 『おおかみのこがはしってきて』文：寮美千子 画：小林敏也（ロクリン社）
- 『どんぐりたいかい』文：寮美千子 絵：所由紀子（チャイルド本社）
- 『もしも、詩があったら』著：アーサー・ビナード（光文社）
- 『世界はもっと美くなる 奈良少年刑務所詩集』編：寮美千子 詩：受刑者（ロクリン社）
- 『釣り上げては』著：アーサー・ビナード（思潮社）
- 『日本語ぼこりぼこり』著：アーサー・ビナード（小学館）
- 『ドームがたり』作：アーサー・ビナード 画：スズキコージ（玉川大学出版部）
- 『父さんがかえる日まで』作：モーリス・センダック 訳：アーサー・ビナード（偕成社）
- 『なまずこのっぺ？』作：カーソン・エリス 訳：アーサー・ビナード（フレーベル館）
- 『ちっちゃい こえ（紙芝居）』脚本：アーサー・ビナード 絵：丸木俊、丸木位里「原爆の図」より（童心社）
- 『アーサー・ビナード詩集 ゴミの日』著：アーサー・ビナード 絵：古川タク（理論社）
- 『ガラガラヘビの味 アメリカ子ども詩集』編訳：アーサー・ビナード、木坂涼（岩波書店）
- 『はらぺこあおむし』作：エリック・カール 訳：もりひさし（偕成社）
- 『かいじゅうたちのいるところ』作：モーリス・センダック 訳：じんぐうてるお（富山房）
- 『まよなかのだいどころ』作：モーリス・センダック 訳：じんぐうてるお（富山房）
- 『ホットケーキできあがり！』作：エリック・カール 訳：アーサー・ビナード（偕成社）
- 『えをかくかくかく』作：エリック・カール 訳：アーサー・ビナード（偕成社）
- 『ダンデライオン』作：ドン・フリーマン 訳：アーサー・ビナード（福音館書店）

（以上、登場順）



第14回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

発行 世田谷区立中央図書館  
〒154-0016  
東京都世田谷区弦巻3-16-8  
電話 03-3429-1811  
FAX 03-3429-7436  
発行月日 令和2年5月  
広報印刷物登録番号 No.1858